

ジョクジャカルタ市コタグデにおける

社会人類学調査の予備報告

中 村 光 男*

ま え が き

以下は、私が最近ジャワ島で行なった社会人類学的調査の予備報告である。調査は、「ジャワ都市の社会と文化のパターンの一研究」(A Study on Urban Patterns of Javanese Social Structure and Culture) という題目の下に、1970年10月より1972年4月までの19カ月間、インドネシア共和国ジョクジャカルタ特別州の州都ジョクジャカルタ市の東南約7キロメートルの地点にあるコタグデ(Kotagede)という町で行なわれた。調査は、コーネル大学人類学部に1973年5月提出予定の博士論文のためのフィールド資料集めを直接の目的とした。調査資金は、ロンドン・コーネル・プロジェクトより18カ月分の研究費、本人と家族の生活費と旅費の援助を受けた。インドネシア側では LIPI が公式の受入れ機関となったほかは、他の学術・教育機関との関係はなかった。

調査地には、1970年の11月から家族と共に一戸を借りて住みついた。妻・緋紗子は人類学の素養があり、私の助手として手伝う以外に、滞在期の後半には、自分で独自の調査を行なった。子供は、現地到着時5才の女子と4才の男子、それに、インドネシア到着後3週間目にジョクジャカルタ市で生まれた男子の計3人であった。助手は、コタグデ町内出身の大学生を延5人やとった。

調 査 の 目 的 と 計 画

調査は、ジャワの伝統的都市の社会と文化について民族誌的情報を得ることを大枠の目的とした。この研究題目を選んだ理由は以下の通りである。

第1に、ジャワ農村部に比して、都市部の研究は皆無に等しいこと。ジャワ社会は、少なくとも数百年来、都市と農村から構成されているにもかかわらず、農村だけを見るのは、ジャワ社会の理解にバランスを欠くこと。

第2に、ジャワ社会の現況を見るに、総人口中、都市部人口の占める割合は、年々急激に増えており、経済・政治・教育・宗教などの諸分野で、都市が社会変動の起点になっていること。従って、今日から将来へかけてのジャワ社会の動向を予測する場合、都市の研究が欠かせないこと。

第3に、しかしながら、現在進行している都市化はイコール西欧型都市化ではなく、ジャワ都市土着の文化と社会のパターンの中で、連続と変化が起こっているにちがいないこと。従って、西欧や日本の経験をもとにした都市社会学の枠組や研究法を無批判にあてはめるのではなく、人類学的なインテンシヴな調査によって、ジャワ都市の独自の社会と文化のパターンを探り出す作業がまず必要であること。

上記の第3の理由から、中部ジャワの旧侯地領(ジョクジャ・ソロ)の都市をはじめから調査の候補地とした。なぜならこの地域で

*コーネル大学人類学大学院

は、植民地化、西欧化、工業化の影響が最も遅く、最も少なかったからである。調査の地理的単位をどのようにとったらよいかわからない難点があるため、ジョクジャカルタ市とスーラカルタ（ソロ）市の二大都市は、はじめから避け、小・中都市を考慮の対象とした。当初の計画では、中部ジャワ州のクラテン（Klaten）と、後に実際の調査地となったジョクジャ特別州のコタグデの2カ所を候補地としたが、現地に行って1カ月ぐらいたった頃、民族誌的調査を2地点で充分に行なうことは1年半の時間的限界内では不可能であると悟り、クラテンでの調査の計画は放棄した。

調査の方法は、ロナルド・ドアの東京市民生活の研究を一応のモデルとし、ジャワ都市住民の生活を調査者自身の経験、観察、面接によって理解しようというアプローチをとった。従って、検証されるべき仮説をあらかじめ持って入るということはしなかった。むしろ、フィールドで経験を蓄積していく中で、調査対象社会の問題点や面白味を見つけていくという基本的態度をとった。

調査地の概況

コタグデの町は以下のような特徴をもっている。第1に、urban settlementとしての歴史が非常に長いこと。西暦1600年前後、後期マタラム王国が独立した王国となった時、コタグデがその拠点であり、同王国の最初の首都、王宮（クラトン kraton）所在地となった。（Kotagede は「大きな、偉大な町、都市」の意）首都はその後間もなく他に移ったが、コタグデは、他の多くの旧ジャワ王都のように、遷都の後に農村に還元してしまうということがなかった。

第2に、マタラムの「聖地」としての性格である。コタグデの中心部、旧王宮の所在地の西側に、マタラム王朝創始者たちとその家族の墓があり、現在に至るまでジョクジャと

ソロの宮廷の役人によって管理されており、宮廷の儀礼はもちろん、ジャワ民間信仰の中心となっている。

第3に、町の成立以来、今日に至るまで、ジャワの伝統的手工業と商業の一中心となって来た。コタグデは別名パサル・グデ（Pasar Gede）と呼ばれ、これは「大きな市場」を意味する。市場は、たしかに物理的にも大きい。そればかりでなく、コタグデの町全体が、伝統的商品（パティク、金・宝石細工、台所用品）に関する限り、中部ジャワから東部ジャワ、さらには外領にまで及ぶ大流通ネットワークの要の一つなのである。

第4に、コタグデは、近代派回教徒運動の一拠点である。「ムハマディヤ（Muhammadiyah）」の支部が、発祥地のジョクジャカルタ市内のカウマン地区に次いで早く結成されたと言われ、同組織の中部ジャワ現存の支部中、最強の支部四つのうちの一つに入る。

第5に、1965年9月以前は、共産党の一大拠点であり、蜂起準備のための軍事訓練センターの一つがここにおかれたと言う。1955年の総選挙では、共産党が第1党であり、65年の9月30日事件までは、町の住民の多数派は共産党ないし PNI 支持者であった。

人口は、1971年10月現在で、行政区域内の総数が約2万人で、このうち、「コタグデ・コタ」と現地の人が呼ぶ都市部に住んでいる者の数が約1万5千人である。職業は、手工業・商業に従事するものが圧倒的多数を占める。全世帯主の職業構成をみると、ブルフ（Buruh）と呼ばれる日給の非熟練労働者、バクル（Bakul）と呼ばれる行商人・路傍商人が、合わせて50%以上を占める。これに、次いでトゥーカン（Tukang）と呼ばれる熟練した職人が約20%、企業家、店をもった卸売商人・小売商人が合計10%足らず、パガワイ（Pegawai）と総称される政府の役人と私企業の給料取り、軍人と警察官、退役官吏等の

年金受領者が合わせて10%足らずとなる。

町の経済活動には華僑は一人も入っていない。外国人は、私の家族のみであった。町の人たちは、コタグデは「100% ジャワ・アスリ（純ジャワ）」であると自慢している。ヒルドレット・ギャーツは、インドネシアのコミュニティ類型論の中で、コタグデに言及して、コタグデはジャワの地方都市としては例外的・非典型的だと言った。彼女は、この言明の理由を詳しく述べていないが、マタラム宮廷との関係が非常に深いこと、商工業の中に華僑が入っておらず、企業家・労働者ともにジャワ人であること、オランダの植民地化によって生まれ、発展した町ではないこと、などが理由であろうと私は推測する。しかし私の意見では、これをもって、コタグデを非典型であるとは断言出来ないと思う。私の見るところでは、ジャワ中部・東部の都市に遍在する社会的・文化的諸要素は、すべてコタグデにも見出され、たとえコタグデが例外的であるとしても、それは、これらの諸要素の結びつき方、コンフィギュレーションが他の都市と異なっているのだと考える。従って、なぜコタグデ的な型がジャワに遍在する諸要素の中からつくり出されて来たのかを考慮してみる意義がある。華僑にしても、戦前入ろうとしたが追い出されたのであり、コタグデ出身のジャワ人企業家たちは、ジョクジャ市の目抜き通り、マリオボロでも、また他のジャワの中小都市でも華僑を相手に堂々と対抗する力を持っているのである。

私が、コタグデに執着した理由は他にもある。後年第2次世界大戦前後に、オランダ植民地帝国最後の、最高の官僚・政治家の一人となったファンモークが、未だ若かりし頃、土地問題専門の地方官吏として、ジョクジャ侯地領に派遣され、コタグデに関する詳細な調査報告を作製した（1926年公表）。この調査は、侯地領における地方分権化政策（Decen-

tralisatie）実現のための基礎調査として行なわれたものらしく、コタグデ現地の伝統的土地制度およびその改革後の状況について詳しい記述を含んでいる。この報告を、いちおう1920年前後のコタグデを反映するものと受け取ることが出来るとすると、現状をこれに対比させることによって、約半世紀をへだてた2時点のコタグデの比較が可能になるのである。ジャワの他の地点でも地方レベルの植民地文献の研究が進めば、同様のことが可能であろうが、今、公刊の資料だけで、このような同一地域社会の時間的比較が出来る所は、極めて少ないと思われる。しかも、1920年から1970年の半世紀は、ナショナル・レベルでインドネシア全体が、オランダ植民地制の崩壊、日本軍の占領と軍政、インドネシア共和国の独立と対オランダ独立戦争という三つの大きな時代区分的変化を経験した時期であった。いったい、この間に、ローカル・レベルで何が起きたのか、コタグデはどう変わって来たのか、を問う歴史的関心からの研究も、このファンモーク報告が可能にしてくれるのである。

調査内容と資料

実際の調査の内容とそれによって得られた資料の種類を項目化して列挙すれば、次のようになる。

1. 地理：狙いは、コタグデの社会地理的情報を得ることにあった。官製の行政区分図すら、インドネシアではなかなか手に入り難い。苦勞して、ジョクジャカルタ特別州の地図（Scale 10万分の1）、その中の各カブパテン、ジョクジャ市の地図（それぞれ5万分の1、1万分の1）を手に入れた。コタグデ・プロパーに関しては、行政地域内の約3分の1の地域に関しては、共和国時代になってからの官製の地図は未だ作製されていない。他の3分の2に関しては、隣組・村単位の地図

(Scale 1/500~1/1000)を手に入れ、自分で歩いて、これに必要な情報を加えた。この地図類の中で、最も重要なものは1952年作製の隣組単位の宅地の測量図で、役場にある土地台帳の原簿とつきあわせると、この20年間の宅地の所有権の移動を詳細にたどることが出来る。両者を一べつした印象を言えば、わずか一世代も経過しない間に、所有権の譲渡・分割がきわめて頻繁に行なわれて来ており、ジャワの農地についてよく言われていると同様に、細分化が激しい。しかし同時に、再集中化も進んでいる。面白い事に、分割によって細分化されるのは、権利だけであって、土地・建物の物理的分割は減多に起こらない。言うまでもなく、現地の人たちにとって、土地・建物は金・宝石に次ぐ最重要な富の蓄積形態の一つであり、貧富の差の最も明確な指標である。

ファンモークは、1926年の報告に、土地保有状況を示す地図二葉をつけた。もし、オランダの植民地文献の中から、この地図よりもっと詳しい所有者の名前まで明記した行政改革前と後の宅地登記の記録が見つければ、私は、コタグデ内の宅地の所有の移動について、約50年間に及ぶ期間中の動きをたどることが出来る。

2. 歴史：コタグデは、後期マタラム王国の年代記的なもの（ババッド Babad と総称される）の中にしばしば登場する。これらのババッドの中で、特にコタグデにとって重要なものはマタラム王朝成立を物語った「ババッド・タナ・ジャウイ Babad Tanah Djawi」と、1825~30年のディポネゴロの反乱をディポネゴロ自らが記述したと言われる「ババッド・ディポネゴロ Babad Diponegoro」の二つである。この二つは、コタグデに関する歴史的事実の再構成にとって、また、ジャワ人の歴史観を知る上に、大いに役立つ。ただし、私の能力では、今のところ前者の目的にしか

利用できない。

これらのすでに公刊された宮廷史料以外の宮廷史料は、現在全く利用不可能である。なぜなら、ソロもジョクジャ宮廷も、依然として史料の大部分を公開していないからである。金と暇にあかせば、少しは手に入るかも知れないが、私にはそのいずれもなかったので、接近は断念した。現地では、今、金にあかせたドイツ人社会学者、ヒマにあかせたイギリス人歴史学生が両クラトンの史料庫の攻略を試みているが、恐らく間もなく敗退するであろう。

そこで私は、コタグデ・ローカルの史料を探したのだが、収穫は皆無に近かった。すでに散逸・消滅したか、あるいは大事すぎて他所者には見せられないかのいずれかで、印刷になった「王墓の経緯」に関するもの、ごく最近の学校の由来や、簡単な個人の伝記的なもの以外は手に入らなかった。

口伝や記憶による最近50年間の出来事の再建はある程度可能で、私の歴史史料はもっぱらこれによる。

3. 政治：私はちょうど都合よく、1971年7月に行なわれた共和国第2回の総選挙の運動期間が始まる前に、フィールドに入り込み定着しはじめることが出来た。運動期間中にぶっつかったら、どこにも入れなかつただろう。種々の困難があつたが、4月のカンパニア開始から7月の投票日まで、私は、全エネルギーをあげて、ローカル・レベルで総選挙の過程を追った。各政党の選挙運動の観察、指導者との面接、ビラ・パンフレットの収集、有権者の動向など、能うる限りの情報を集めた。投票の結果は、最小単位である各投票所ごとの数字をとった。1955年の第1回総選挙時の状況と投票結果の情報も得た。

4. 行政：先にふれたコタグデ・コタの大部分は、ジョクジャカルタ市に属し、日本の区役所に相当するが、それよりも、地域・規

模のずっと小さい、「クマントレン」(Keman-tren)という役所が、市行政の末端として存在する。この役所は、任命制のマントリ(Man-tri)が長である。その下は、「自主的社会組織」と地方条例に規定されているルクン・カムプン(Rukun Kampung, RKと略称される)であって、この役員は、選挙制、無報酬である。RKは、さらに、10~20家族よりなるルクン・テタンガ(Rukun Tetangga, 文字通り隣組という意味でRTと略称される)に分かれ、RTの役員も選挙制、無報酬である。10~40のRTが集まって一つのRKが組織されている。

コタグデ・コタの他の一部は、カブパテン・バントゥール(Kabupaten Bantul)に属し、行政組織は村(カルラハン Kalurahan)で、村の役人は選挙される。コタグデ・コタには一つの村の全部と他の村の一部が含まれる。コタグデ・コタに全部が入っている村は、役田にする田地がないため、村の役人はカブパテンの政府から給料をもらう。コタグデ・コタの中に一部入っているほうの村は、残りが農村部であるから、村役人の役田は確保されている。

このように、コタグデ・コタという人口1万5000、東西南北1キロ四方にも満たない狭い地域の中に、三つの異なった性格の行政組織の末端が入りこんでいるのである。なぜこういう複雑・不合理なことになったのか。なぜ「合理化」されないのか。この疑問に答える中で、ジャワ的行政組織の特質が色々と明らかになって来る。資料としては、行政区分の経緯、この行政組織の諸ポストにどんな人間が入っているか、どんな仕事をしているか、上部組織との関係、現地住民との関係について得た。またこのシビルの体系と平行している軍・警察に関しても、同様の資料を得た。

5. 隣組とカムプン：自主的社会組織とい

れとは別に、地縁組織としてのカムプンは厳としてある。1RK=1カムプンあるいは1RT=1カムプンの場合を除いて、住民の側からは、RK・カムプン・RTの使いわけが行なわれる。この使いわけのやり方、それぞれの社会的・文化的特性について資料を得た。また、過去5~7年間の隣組役員の変化について出来得る限り詳しい情報を得た。

6. 人口統計：村と隣組の最重要な仕事の一つは、人口の動態報告および10年に1度の全国センサスへの協力である。動態報告は、週・月単位で行なわれる。コタグデ・コタに属する一つの村では、1950年代末から1971年までに至る週単位の人口動態報告を全部洩れなくコピーし得た。信頼度の検討が必要だが、ミクロの人口動態分析のための絶好の資料である。他の村や隣組では、この人口動態報告は1966年からそろっておればよいほうで、それ以前はすべて散逸しており、クマントレン・コタグデ単位で集計された月間動態報告は、1961年から、ほぼ完全にそろっているが、これは信頼度の恐しく低いものである。

1971年9月~10月の共和国第2回の全国人口センサスの結果は、コタグデ全体の約3000家族分の原票を全部写して来た。またこのうち大部分に関して、私の助手の手によって、個別的再チェックが1972年1月~2月に行なわれた。この作業によって、公式のセンサスの結果に、どれくらい、どのような誤りが含まれているのか、また、そのような誤りは、なぜ発生するのかわかった。(極端な例になると、RKの総人口の7%の取り残しや、5%のdouble counting, などがある。最も多いのは、数字・文字の誤記、集計の計算間違いである。)

また、この再チェック作業の際に、世帯主以外の者の職業、および全世帯構成員の世帯主に対する関係の二項目を加えて調査したので、コタグデの全住民に関して、職業構成・家

族構成をも含めて、望み得る最高に正確な人口センサスの資料を得たと言うことが出来る。

7. 宗教：イスラム・非イスラムを問わず、種々の宗教的行事・活動に出来得る限り接近した。当初、特定の宗教グループと同一視されるのを警戒して、可能な限り公平に、種々のグループとつき合ったのだが、その間に、私自身のイスラム近代派への興味が増して来るにつれ、ムハマディヤの人々と最も親しく接するようになった。この中で、指導者の数人には、日常に接して、その毎日の行動、ライフ・ヒストリー、家族・親族・婚姻関係などについて、詳しい情報を得た。また、ムハマディヤのコタグデ支部全員の会員名簿の原簿を写させてもらった。非イスラムでは、「王墓」をめぐる民間信仰に主として注目し、観察と聞きとりを行なった。

8. 芸能・娯楽：町の公式行事の際のアトラクション、入場料をとる興行、市場や大道での芸人のパフォーマンス等、機会のある限り、私自身の娯楽のためにも、観察した。とくに、村芝居（ケトプラク Ketoprak）に関しては、芝居の筋、役者・裏方の社会的背景、芝居の行なわれるセッティング、観客の種類と反応などについてかなりまとまった資料を得た。

また、イスラム近代派の「ジャワ固有の文化・芸能」に対する考え方と対応の仕方、イスラム文化運動の現状についても、多少の資料を得た。

9. 経済：コタグデで行なわれている経済活動の種類、生産・流通・消費の過程、個人の所得の源泉と額、消費のパターン、貯蓄に対する考え方と仕方、過去50年間の町の経済の動向などについて、一般的情報を得た。さらに無作為抽出の60世帯に関して家計、財産、職業歴など、質問票による調査を行なった。また、町の代表的な企業家に関して、企業活動の内容、職場の観察、企業の来歴今、後の

見通しなどについての調査を行なった。

町の経済活動を知るための官庁資料は非常に貧弱で、企業・店舗の許可発行記録を写せただけにすぎず、企業税のシステムは複雑怪奇でとうとう信頼できる資料は見つからなかった。銀器の生産協同組合に関しては、過去約10年間に及ぶ年次報告書その他の文献を手に入れ、これに幹部とのインタビューを加えて、ほぼその活動の全貌を明らかに出来る資料を得た。

10. 家族・親族：すでに述べたように、71年の人口センサスの原票の写しとその補訂資料によって、コタグデに存在する家族類型を統計的に明らかにすることが出来るデータを得た。さらに、無作為抽出の60サンプルの家族に関しては、ほぼ4世代にわたる親族系譜関係（genealogy）と婚姻関係を明らかにする資料を得た。

とくに、イスラム近代派の中核になっている二つの大きな擬制的親族集団の成員に関しては、親族系譜関係、婚姻関係と結婚歴、学歴、職歴などについて情報を得、これらの点に関して、普通のジャワ人とどのような対比をなすのか明らかに出来る資料を得た。

家族・親族・婚姻関係の行動の規範と実際に関して、一般的観察と聞きとりを行なった。この際、とくに家族（keluarga 狭義）・世帯（rumah tangga）・親族（keluarga 広義）の概念のちがいと、その使いわけ、実際の行動の差違に注意した。

11. 結婚・離婚：この分野は、私の妻緋紗子が主として調査を行なった。調査は大きくわけて、三種類になる。第1に、官庁資料のコピーで、コタグデ内の宗務事務所三カ所にある過去5年ないし10年の結婚・離婚の登記を全部写した。離婚に関しては、市の宗教裁判所で直接判決されたものも集録した。（普通、公式発表の離婚率の中に、これは含まれていない。）第2に、その中で、1960年と1965年

内に結婚した約300組の夫婦に関して、1972年1月現在に至るその後の結婚歴 marital history を明らかにする follow-up survey を行なった。

第3に、イスラム婦人運動の指導者たちが宗務部と協力して行なっている結婚・離婚のカウンセリングに関して、相談の実際を観察し、約10件に関して詳しい情報を得ると共に、同相談所にあるカウンセリングの記録、統計などを写して来た。

緋紗子はこれらの資料をもとにして、ジャワ回教徒の結婚と離婚に関する独立した報告を発表する計画である。私は、協力して資料の整理・分析・解釈に当たると共に、私の論文にその成果を利用するつもりである。

12. 文献：以上の諸項目の中でふれた文献の他に、現地で集めた文献は多量で種類も多岐にわたるが、その中でイスラム関係が最も多い。ムハマッディヤ・コタグデ支部の出版物は、手に入る限り集めた。また、ジョクジャ市やジャカルタで出版されたイスラム近代派の立場からのイスラム法の解説書、宗教講話集、政治的パンフレット等、私の興味を引いた限り買い集めた。

新聞・雑誌に関しては、ジョクジャ市で発行されている3種類の日刊紙を1971年1月から1972年3月まで講読し、毎日眼を通してチェックした上、全部持ち帰った。また、ジョクジャ市で発行されているジャワ語の雑誌（月2回刊）を1年半分、カソリック系の月刊文化教養誌を2年分そろえた。

13. 写真・テープ：35ミリ白黒写真約60本、カラー5本。内容は、総選挙、隣組・村の選挙、公式行事、市場・街頭の風景、家・建物、手工業の仕事場、芸能・娯楽、宗教的儀式・集会、結婚式、葬式、割礼の場面など。テープはカセット1時間ものの約20本で、選挙演説、宗教講話、離婚カウンセリングの実況などを含んでいる。

問題領域と論文の構想

以上のフィールド資料は、重さで計ると150kg位になり、この膨大な資料をどのように博士論文に料理すべきか、目下思案中である。論文提出目標1973年5月という時間的制約があるので、これらの資料の一部分しか論文に利用できないであろう。記録した事は何でも洩らさずに再録してあるような、コミュニティ・スタディ式のモノグラフは、書こうと思っても書く時間がないし、また、書く意志もない。そこで、フィールドを通して、とくに私の関心を引き、また、私自身面白い発見をなし得たのではないと思われる問題領域に集中して、資料の整理・分析・論文化を行なうことになるであろう。

現在、私が重要な問題領域として考えているものは、以下の3項目に要約できる。おそらくこれらが、論文の主要3部分を構成することになるであろう。

1. ジャワ社会関係原理論

クリフォード・ギアーツは、現在のジャワ社会が、その伝統的段階から、近代的段階に移る過渡期にあると考えた。この過渡期のただ中であって、ジャワ社会の伝統的構造はもはや自己を維持し得ず、そうかと言って、これに代わるべき近代的社會構造も未だ自己を確立し得ておらず、従って、非定型的、欠構造的状況が社会のあらゆる側面に見られるとしたのである。都市化という観点からみれば、このジャワ社会の過渡的特徴は、農村部の村落共同体の社會構造の諸原理が、人口の都市への流出と共に、都市部へ持ち込まれ、農村と經濟的基般が異なるにもかかわらず、都市でも村落共同体が依然として、いわば擬制として生きつづけていると考えたのである。

私のフィールドでの経験と資料は、このギアーツのジャワ社会観に、二重の疑問を抱かしめる。第1に、伝統的村落共同体が意識さ

れた規範・理想として、あるいは、客観的に働いている社会構成の原理として、一度でもジャワ社会に存在したかどうかという疑問である。第2に、第1の疑問の系として、村落共同体が、擬制として都市にも存在すると見てよいかという疑問である。

今、村落共同体を、極めて広義に、一定の土地を前提とし、その土地に対する人間の関係を通じて、個体を超越した corporate group が成立するという社会構造原理と定義した場合、ジャワでは、このような社会構造原理は一度も働いたことがないのではないかというのが、私の意見である。これは暴論に聞こえるかも知れないが、現実と史料を虚心に見れば、こう考えざるを得ないのである。

それでは、ゴトン・ロヨン（相互扶助）のイデオロギーと慣行、土地の保有状況を基準にした農民のステータスの決定、「共有地」の再分配の制度等、ジャワ農村に明らかに見られる村落共同体的制度は、どう解釈するのだ、という反論がすぐに出されるであろう。私はこれに対して次のように答える。

ゴトン・ロヨンはグループを論理的前提とせず、二個人間の相互関係（dyad）を単位とするものである。農民のステータスと「共有地」に関しては、これは村落共同体の存在を先入観として持ったオランダ植民地官僚・学者が、ジャワ農村に逆に押しつけたものではなかろうかと考える。西暦1600年以前はわからないが、これ以後、即ち、イスラムを受容した後期マタラム王国成立以後のジャワ農村では、村落共同体なるものは存在しなかったというのが、私の推測である。（オランダ人によるジャワ社会論の系譜を知識社会学的に扱って、そこに含まれている植民地帝国擁護の御用学説、倫理政策的思い入れ、社会民主主義的民族主義支持論などを明らかにした上で、ジャワ社会の真実に迫る作業が可能だが、これは将来の課題としたい）。

それでは、村落共同体ではなく、何がジャワ社会の原理であるのかと問われるであろう。これに対して、私は未だ漠然としたイメージであるが次のように答える。先に触れた二個人間関係（dyad）がジャワ社会の基本単位である。何らかの力によって富を押えた個人と、それに服従・保護される個人が最小単位となり、これが上下・左右に珠数つなぎになって村落から都市に至るジャワ社会を形成していると考ええる。

家族・親族の場合も原理的には同様であると考ええる。核家族という枠、共住・共食という世帯の枠、親族という枠、これらは個人を超えたグループとしては、理念的にも、現実にも存在しない。存在しているものは、エゴからみた父・母・夫・妻・兄弟・子供という二個人間の関係であり、これの人々とたまたま同じ場所に住んでいるという同居関係であり、何らかの形で他人と血縁がたどり得るという親族関係である。

同様に、地縁組織であるカムプン＝部落も、dyad としての隣人関係の拡大・延長、および総和として存在するのみであって、私たちが常識として持つ村落共同体の像とは全く異質である。しかし、イデオロギーやシンボリズムの面では、カムプンは極めて重要で、権利・義務の母体ではないにもかかわらず、慣習的単位として永続性をもつ。（なぜ、このようであるのか未だ説明がつかない。）

現在のインドネシア共和国の国家体系も、ジャワ地域に関する限り、この上下・左右の dyad を単位として成立していると思う。そしてこの dyad 間の調和と一致がジャワ社会哲学の理想像、ジャワ社会倫理の規範なのである。以上の議論は、ジャワの都市・農村を問わず通用し、その農村的 variation, 都市的 variation があるに過ぎないというのが、私の現在の確信である。

これまでの、グループの存在を先入観とし

て持った社会構造論的アプローチでは、ジャワ社会が欠構造的・非定型的に見えるのは当然である。欠構造的＝過渡期的とするなら、ジャワは数百年にわたって、過渡期ということになり、これは明らかにナンセンスである。私は、構造論的偏見を捨て、ジャワ社会関係の現実を虚心に眺めることから出発し、その諸原理をコタグデの資料に即して解明することを、論文の第一部で試みようと思う。

2. イスラム化・その過程と帰結

このジャワ社会にイスラムが入って来た。イスラムの教義とジャワ的社会規範の間に、平行する要素がいくつかあり、これが初期イスラム化の手がかりとなったのであろう。例として、人間的欲望の是認とその理性によるコントロール、グループに対する所属感・忠誠心が少ないために、個人と神が直接 *dyad* を結ぶことが出来る、等が、すぐに思いつかれる。しかし、初期イスラムはジャワ化した。これに対して、近代派イスラムは、脱ジャワ化を目指す。私がここで「イスラム化」というのは、20世紀初頭から今日まで、近代派回教徒によって進められているジャワ・イスラムの改革運動を指す。この意味でのイスラム化は、脱ジャワ化である。この過程に足を踏み入れた個人は、自分の中のジャワ的なものを次々とイスラムで置きかえる作業に没頭する。従って「ジャワ人はイスラム化した分だけ、ジャワ人でなくなる」、あるいは逆に、「ジャワ人はイスラム化していない分だけジャワ人である」と言えよう。ジャワ社会の総体からみると、近代派回教徒はその全性格を変える挑戦を行なっていると言える。私の論文第一部のジャワ社会論は、そこで、イスラム化を扱う第二部へと、必然的に移って行く。

ムハマッディヤに代表される回教徒近代派によって推進されているジャワ・イスラムの純化運動は、単なる教義的理解の深化・教義的知識の増大を意味するにとどまらない。彼

らの主張するコーラン・ハデithの忠実な理解と、それを手掛りとしたアラーへの絶対的帰依は、回教徒個人の全人格・全生活の変化を意味する。変化は、家族・親族・婚姻関係を含む社会関係、経済活動、政治行動、教育、芸能・娯楽など生活のすみずみ、論理的思考から情動のレベルまで及ぶのである。

ローカル・レベルでも、指導者と目されている人たちは、皆この人格の完全転換を達成しているという印象を受ける。彼らは決して「ファナティック」ではなく、合理的議論を好み、心は常に平静で、言行に裏腹がなく、つき合っていて全く気持がよい。彼らはこれまで町の経済、教育、社会福祉、宗教行政の面で指導的地位を占めて来たが、1965年以降は政治、一般行政の分野でも進出しはじめている。

近代派回教徒の抱く社会のイメージ、社会的行動規範と実際の行動は、ジャワ的なものと総体として質的に異なる。彼らの社会観の根底には、ウマット・イスラム＝回教共同体があり、その防衛・強化・発展が、すべての現世的行動の基準となる。国家機関・社会的団体などはすべてこの目的のための手段として、利用もしくは拒絶されるのであって、ムハマッディヤの組織もその例外ではない。従って、現世的機関や組織、またその指導者たちへの忠誠心といったことは問題とならない。だから、共産党なき後、もっとも強固な大衆組織と言われているにもかかわらず、ムハマッディヤの会員たちは、一枚岩的団結と組織統制では動かない。むしろ、ムハマッディヤは、各個人が神に直面し、各自の判断で行動する際の便宜的協力手段としてあるに過ぎない。(この例に見られるように、グループ性が弱いという点で、ジャワ固有もイスラム近代派も表面的には同じなのであるが、その原因、過程は違っているのである。このような外見は同じだが中味、意味がジャワ固有とイ

スラムで異なるという例は、他の色々な側面で見られ、極めて面白い分析の対象となる。）

コタグデの近代派回教徒運動は、ようやく三代目が指導者になりつつある。創始者たちの大半は死んだ。独立革命当時の青年指導者だった者たち（45年世代）も運動の現役から退き、現在、運動は65年以降登場した中、青年層（66年世代）によって推進されている。

この三世代、約50年間に、この運動がコタグデで達成した成果には眼を見はらせるものがある。第1に、イスラムの脱ジャワ化が徹底的に行なわれた。少なからぬ人々によって回教徒戒律が厳しく守られるようになったばかりでなく、個人の通過儀礼、親族や地縁組織の儀礼の面でも、ジャワ的伝統はほとんど姿を消しつつある。第2に、イスラム法の実践である。とくに、ザカット・フィトラ（Zakat fitrah 絶食月明けの回教徒税金）は、組織的に徴集・分配されるようになり、ムハマッディヤの活動の一中心となっている。第3に、教育、社会福祉の推進である。ムハマッディヤの手で、建てられた学校が幼稚園から下級中学までコタグデ内にあり、これから上級中学・大学への進学者も極めて多い。病院も、一般診療所、産院、家族計画指導所まで建設されている。一言で言って、コタグデに関する限り、近代的科学、技術とその実際の知識の普及には、政府のラインよりもむしろムハマッディヤが積極的役割を演じて来たと言ってよい。第4に、経済の分野では、コタグデ住民の所得の源泉の大半は、直接・間接に、近代派回教徒の企業家、商人たちの活動に依存していると言ってよい。（所得源泉の他の一半は、外人観光客を顧客とする銀細工の諸企業に依り、この企業家の中にはイスラム近代派のほかにPNI的・PSI的一団があり、三者を対比させると極めて面白い。）第5に、政治の分野では、近代派イスラム政党（Parmusi）が、政府党のゴルカール（Golkar）

に次いで第2党を占め、村役人・隣組の役員のポストまで進出しはじめている。その結果、これまでのジャワ的政治とは異なった要素が、ローカル・レベルの政治の中で見られるようになって来ている。

近代派回教徒運動は、ジャワにおいて未だ少数派運動である。しかしそのインパクトはジャワの社会変動の一要素として極めて重要である。近代派イスラムは、故ハリー・ベンダの言うようなジャワ社会を薄く覆っている被膜ではない。ジャワ社会の全性格を変える要素を持っている。私は、私のフィールドの資料を通して、近代派回教徒とそうではないジャワ人とを明確に対比しつつ、家族、親族、婚姻、離婚、近隣・友人関係、経済活動と組織などの諸分野で進行しているイスラム化の過程とその帰結を明らかにする作業を私の論文の第2部で行ないたいと思う。

3. イスラムと政治

イスラム化を政治の分野に集中して見た場合、どうなるか。これが、私の論文第3部のテーマとなるであろう。材料として、私は、1965年前後から1971年総選挙に至るまでの、コタグデの政治状況をとりあげる。

9・30事件の前と後で、中央レベルの政治変動に平行して、ローカル・レベルの政治の様相も大きく変わった。機構の大筋は変わらないが諸ポストを占めている人間が大幅に入れ替わったのである。この変動劇のローカルな場での登場勢力は、共産党、ムハマッディヤ、軍であった。変動は、一言で言えば、ムハマッディヤの反共青年決死隊と軍の反共勢力の協力によって、共産党指導者、カードルは全員逮捕・投獄され、彼らが占めていた隣組役員、村役人、協同組合幹部等のポストは空席となり、これらの政治的・行政的真空は、スハルト政権に忠実な軍人、警察官、現役および退役の官吏、ムハマッディヤの一部によって充たされた。

1971年の総選挙とそれに続く村役人、隣組役員の選挙は、この変動劇の公式追認であった。しかし同時に、これらの選挙を通じて、イスラム対ジャワの対立が明確に出て来た。ジャワ的政治権力の維持・強化を求める勢力と、イスラム的政治改革を求めるものの対立と言ってもよい。結果は、前者が依然多数派であることを示したが、後者がこれらの過程を通じて、組織の強化、政治的感覚と経験の蓄積を遂げたことも事実である。

いまジャワ的政治権力という言葉を使ったが、これはベネディクト・アンダーソンの考えに従うものと受け取っていただきたい。私流に言い変えると「宇宙に存在する力は、一定であり、その集中、蓄積、分散、移動（譲渡、奪取、盗み取り等）の操作によって、人間および集団間の強弱、支配・被支配の関係が決まるという概念」と定義出来よう。つぶされた共産党を含めて、現政治勢力の大半、すなわち、ゴルカール（現政府党）、PNIは、このジャワ的政治権力の概念を根底に持っているとは私は考える。これに対して、イスラム近代派の政治概念は「脱ジャワ」であって、イスラム法を実現し、イスラム共同体を防衛・強化・発展させるため、イスラム教徒による公的権力の樹立が彼らの理想なのである。従って、それを実現する以前の、現実政治の場での相対的なポストの奪い合いは、彼らの関心の中心事ではない。このように、同じ政治という場で、ジャワとイスラムは相対していながら、運動のスタイル、内容、意義付けなどの面では全く異なるのである。

この観察から、私はクリフォード・ギヤーツの「アリラン」の概念に大きな疑問を持つ。ギヤーツは、アバガン、プリアイ、サントリの世界観的オリエンテーションと三大政治イデオロギー、共産主義、民族主義、イスラムがほぼ対応し、これらにもとづいて、三大政治勢力—アリラン—が成立し、その間の勢力

関係によって、ジャワの政治構造が決定されていると考えた。私は、ジャワの政治的対立は、共産主義を含めたジャワ的なものとイスラムとを基本軸とすると考える。さらに、同じくアリランと言っても、ジャワの勢力とイスラム勢力のアリランの内部の構造は、質的に異なっており、また両者間の政治のゲームのルールもほとんど共通なものがないので、アリランは分析あるいは説明の概念としては、ほとんど意味も持たないと思う。

ともあれ、私は、論文の第3部において、65年以前と以後の政治諸勢力の配置状況とその現在までの変化の過程を出来るだけ詳しく再建し、その上で、現在進行しているジャワの政治劇の構造を分析し、それによって、今後の政治過程の展開の見通しを得たいと思う。

あとがき

以上、手元に、文献と資料を持たずに走り書きした。従って参考文献を明示出来ていないが、予備報告の性格ゆえ、容赦していただきたい。論文提出後は、出来るだけ早く、主論文の全部または一部を英語・インドネシア語・日本語で発表したいと思っている。その際には、社会人類学、インドネシア地域研究の同学の方々のみならず、都市化、イスラム化、経済近代化と宗教の役割などの諸問題領域に関心を持っておられる他の専門分野の方々の批判をも頂きたいと思う。

最後に、この予備報告のもとになった口頭報告の機会を与えて下さったアジア経済研究所、また、この予備報告を印刷の形で発表する機会を与えて下さった京都大学東南アジア研究センターに、感謝の意を表する。個人としては、中根千枝、石井米雄、永積昭、原忠彦、後藤乾一の諸氏との議論の中から種々の示唆を得た。記して感謝する。

（1972年7月ライデンにて）